京都府教育委員会教育長賞

「プラスチックフリーライフをめざして」

亀岡市立亀岡中学校　3年
菅原　龍佑

「使い捨てられたプラスチックが世界の海に流れ出す量は、二〇五〇年までに世界中の魚の総重量を上回る！」そんな大きな見出しと共に目に飛び込んできたのは、浜辺に大量に打ち上げられたごみと、海上に漂うごみの写真。「作る責任と使う責任」－この大きな責任をとる覚悟があなたにありますか？と厳しい問いを投げかけられたようで、この写真から目が離せなくなってしまった。

レジ袋やお菓子の包装、ペットボトル……。プラスチックは、私たちの暮らしの中に広く浸透し、私たちは、日々大量のプラスチックを消費し続けている。このまま何も手を打たず消費し続けたら……。プラスチックで埋め尽くされた海を想像するだけでぞっとしてしまう。

安価で軽く、加工しやすい人工素材プラスチックは耐久性も高く、戦後急速に普及したという。しかし、半永久的に分解されないために、様々な問題が叫ばれるようになり、特に、海への流出による海洋汚染が深刻な問題となっている。特に、生態系への影響が大きく、劣化して小さくなったプラスチックがウミガメの胃の中から発見されたり、死んで流れ着いたクジラの胃から、ポリ袋やペットボトルなどが大量に見つかった例も紹介されており、今や、プラスチックは、私たちの生活を脅かす存在になりつつある。

では、これから私たちはどのようにプラスチックとつきあっていけばいいのだろうか。

私の住む亀岡市は、昨年末に「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」を行い、全国で初めての罰則付きのプラスチック製レジ袋禁止条例の制定を目指し、さまざまな取り組みが進められている。

亀岡市がこの宣言を行うに至るまでの背景を調べてみると、今から約十四年前、保津川下りの船頭さんが保津川渓谷の環境保護のために、プラスチックごみとの闘いに挑んだところからスタートしたそうだ。実際、大雨による増水の後はプラスチックごみがむき出しの木の根に大量に引っかかっているのを目にしたり、以前に比べて犬の散歩コースの川のごみが目につくようになった。これらの光景は、決して人ごとではなく、身近な私たち自身の問題なのだと教えてくれる。

しかし、この条例の話を聞いたときは、少し性急すぎないかという、どちらかと言えば否定的な意見の方が正直多かったように思う。昨年末に、クラスでアンケートをとってみたのだが、やはり反対意見の方が多かった。理由として、スーパーなどに出かけるときは、エコバックの持参を意識できるが、そうでない場合は困るのではないか。また、レジ袋を再利用したいと考える人もいた。さらに、現在建設中の新しいスタジアムが完成し、多くの観光客が訪れたときに、レジ袋廃止の趣旨を上手く理解して貰えるのかなど、未来を危惧した意見も見られた。このように、便利さと環境問題を天秤に掛けたとき、便利さのほうを優先してしまう事の方が今はまだ多いのが現状のようだ。

昨年、家族でカナダを旅行したとき、現地のスーパーで、新鮮に感じる出来事があった。フルーツや野菜、肉やチーズ、総菜などをあらかじめパック詰めしておくのではなく、欲しい分だけバイキング方式で購入するといったシステムが機能していたのだ。この方法であれば、余分な包装は省けるし無駄もない。何よりフルーツのいい香りが漂う中で、売り手と買い手が会話をしながら、買い物自体を楽しんでいるように見えたのが印象的だった。かつての日本も、お酒や醤油等はリサイクルのきく瓶売りであったし、買い物に行くときは買い物かごなどを持参するのがあたりまえの光景だったのだ。私たちは、便利さと引き替えに本来大切にしなければならないものを見失ってしまったのではないだろうか。

自然に還るという生分解性プラスチックなど新しい技術の研究も進んでいる。しかし、そのような新たな製品の完成や普及を期待するのではなく、作る責任はもちろんのこと、使う責任、そして使った後の責任を、一人一人がすぐに行動に移すときにきている。新しいルールも、一人一人の意識や行動が変われば新たな習慣として定着していくはずだ。分別の徹底やレジ袋の持参など、できることを習慣化し、プラスチックフリーライフを一人一人が楽しんで実践できる社会にしていきたい。